

# 山崎郷土叢報

No. 71

63. 4. 18

兵庫県宍粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話 62-2000

## 近世初頭の山崎藩 (二十九)

島田 清

二、池田輝澄時代 (統二十八)  
○ 新参派と古参派の対立

池田輝澄の側室を叔母にもつ菅友伯が輝澄家臣に加えられたことがもととなって、家中に新参派しんさんぱいの団結と台頭が見られたことは前回に述べた。これが、別所六左衛門組小頭の金銭貸借問題に介入し、家中騒動のくすぶりを起こし出したそもそのものはじまりは、小川四郎右衛門の申入れである。

ことの起こりは、既述のとおり、六百石取りの旗奉行、別所六左衛門組の小頭こがしらが、六左衛門妻女の銀子であるといつて小銭を部下足輕に借すことを始めたのがもととなり、しだいにひろがって石丸六右衛門・小川三郎兵衛の組下足輕も、それを借りるようにな

### 目次

一、近世初頭の山崎藩 (二十九) …… 島田 清 ……	1
二、山崎六地藏物語 青蓮寺地藏の巻 ……	5
三、戸原物語 (一) …… 志水出世 ……	6
四、大歳神社と千年藤 …… 長川耕一 ……	8
五、木曾路研修旅行記 …… 安井清介 ……	10
六、蔵書活用について …… 事務局 ……	12
七、祝 創刊三十周年記念 ……	16
八、記念講演会のご案内 ……	45
九、事務局だより ……	46

った。そして、月々の償還も終りに近づいたころ、別所六左衛門組の小頭こがしらから、突然、全額を一時に返済するよう求められた。しかし、それができず、もたついているときに、別所六左衛門組の組下足輕あがりが石丸・小川組下足輕を打擲うちなげする、という事件が起きた。

この処理は、十一人の物頭が集って協議し、事件に関係した別所・石丸・小川、三組の足輕を召放す(追放)ことで一応の落着

を見た。

「喧嘩両成敗」を原則とした処断である。しかし、貸した側の別所六左衛門ならびにその部下小頭の間では、この処置に釈然とせぬものをもっていった。それは、「理非曲直を明らかにして処断する」という原則がしだいに取り入れられる時代に入っていたからである。と同時に、別所六左衛門が新参派の組頭、石丸六右衛門・小川三郎兵衛が古参派こせんの組頭で、両者は、平素から対立の関係にあったからである。それだけに、別所六左衛門ならびに同派の人たちは、両方を同じレベルで処断することをどうしても容認できなかつたのである。記録の中には出てこないけれども、菅友伯、小川四郎右衛門らの耳にも入れ、何とか「貸したものの」のメンツを保持できる処置となるよう、結着の変更を求めた張本人は、いうまでもなく、別所六左衛門その人である。江戸詰家老として三千石の禄を食み、藩内では伊木伊織に次ぐ第二の権力者である小川四郎右衛門が、喧嘩の処理を取扱った物頭十一人に、

何とか、別所の組にも少々の勝をつけ、  
彼らが憤らないようにしてほしい。

という申入れをしたのは、それが、表面化した第一弾であった。小川四郎右衛門のこの申入れは、一見、何でもない、軽いことながら——たかが、足軽の処置に関することだけ——のように見える。しかし、そうではない。具体的な内容を示してはいないけれど

ども、「別所組の者にも少々の勝をつけ」というのは、「金を貸した側」の立場は、何としても、「貸してもらった側」よりは一  
段、上の位にあると考え、たんなる「喧嘩両成敗」という結果本  
位の処置にせず、少し、別所側に軽い取扱 少くとも、貸した  
側の優位性を認める処置 に変更してほしい、というのである。  
そうすれば、別所組の者も、不満をおさめるだろう、と付け加え  
ている。

一読して、この申入れが、小川四郎右衛門自体の判断、意見に  
よるものというより、全く、別所六左衛門ならびにその組下小頭  
の言いぶんをそのまま自己  
の意見であるとして申述  
べていることが看取され  
よう。別所六左衛門は、  
物頭十一人協議の席上に  
おいても、石丸・小川組  
下足軽と、自己組下足軽  
を同列に取り扱うことに  
終始反対し、承服しな  
かったにちがいない。しか  
し、十一人の物頭中、新  
参派のものは少く、古参  
派が大部分を占めていた  
ため、六左衛門の主張は

本のある生活を—

さつき書房

山崎町鹿沢 55-3  
☎ (0790) 62-4674

認められず、反対する多数意見に押しきられて結着したのである。もし、この時点で、別所六左衛門が「しかたがない」とあきらめておれば、問題はこれでおさまっていたのである。しかし、別所は、貸した側の優位性を、かたくな（頑迷）に固持して捨てなかつた。それだけに、この結着がなんとしても口惜しく、くやしさに、じっとしておれぬ心になっていたのである。或は、背後に、古参派が、よってたかつて新参派をいじめる、といった情景が見られたかも知れぬ。この時代における古参・新参の関係はなかなか面倒で、どの家中においても、両派の軋轢は、しばしば紛争を起こしている。こうしたことから察して、山崎藩の家中にも、深刻な情勢として、この問題がひろがっていたのかも知れない。別所六左衛門は、それだけに、自己の不満を派閥次元の不満にエスカレートさせ、まず、菅友伯にはかかったと思われる。友伯は、さきにも述べたごとく、「奸佞の人物」と呼ばれるだけあつて、さつそく取りあげ、これを、同派の棟目である小川四郎右衛門に語り、上からの圧力によって別所六左衛門組の「埴り」を貫徹させようとしたのであろう。小川が申入れたことの後半、

「彼らが憤らないようにしてほしい。」

ということばは、こうした経過と意図とを充分に含ませ、発せられたものと思われる。

物頭たちは、小川四郎右衛門からこの申入れを受けると、さつ

そく協議した。この会議の内容も、もちろん、記録されたものはない。

しかし、国もとで起きた一小事件の決着を、わざわざ江戸詰家老から変更を申し出られる筋道について、まず、問題になつたと思われる。国もとの仕置は、国もとの家老が行うのが当然であつて、さきの三つの組の足輕召放しの処置も、国もと家老の伊木伊織が決裁して行われたのである。それであるのに、その決着をくつがえす要求を、江戸詰家老から申出られることは、筋違いも甚だしい。当然、伊木伊織の耳にも入れ、「喧嘩両成敗」の処断根拠を再確認するとともに、さきの処置変更は行うべきでない、との結論を出し、これを小川四郎右衛門のもとへ申送つた。

「喧嘩は理非ではなく、双方が同罪であることが大法である。殊に、元来、別所の妻の銀子から起きた事件であるから、石州殿（石見守輝澄）が聞かれてもよろしくない、と申して同罪にした。」

この答書の内容で、注目される点が二つある。第一は、「喧嘩両成敗」の原則を再確認し、これを強調したことである。第二は、これに付け加えて、別所組小頭の「金貸し問題」を、武士にあるまじき行為として論難したことである。別所組 ひいては新参派の間 では、飽くまで「貸した側の優位性」を表に出し、それをなんらかの形で処断に織りこむことを求めたのであるが、大



部分が古参派である十一人の物頭たちは、「組頭の妻女の小金（へそくり）」を、組下足輕に貸す、という行為そのものを「すべきことではない」とし、これを表面に持ち出したのでは組頭の別所六左衛門自身が傷つく、として裏にかくし、「喧嘩両成敗」の原則をかざして処断したのであるとの基本姿勢を明らかにしたのである。

この点は、古参派が主張するとおり、たしかに、ひとつの論点である。いやしくも、多くの足輕を預かる組頭が、自分自身、手をくさぬといっても、妻女の小金（へそくり）である、という説明を表に立てて、小頭が、部下足輕に金銭を貸し、利足をとっていた、ということとは、そのまま、まかり通れることではない。それも、組内の者だけにとどまらず、他組のものにまで広めるといふのは、これによる利殖を楽しんでいる、といわれてもしかたがない。否、いわれることくらい、別所六左衛門は充分、承知のうえで、蓄銭を楽しんでいたのかも知れない。「武士は食わねど高揚子」式の、名利にてんたんたる士風を強調する側から見れば、ひんしゆくすべき行為といわねばならぬ。

石洲殿が聞かれてもよろしくない。

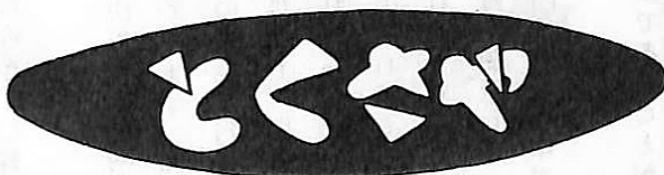
と、返答書の一節に、この点をズバリ明言した裏には、この行為に対する強い憤りが伏在しているのを読みとることができよう。このことを主張した物頭たちが抱いていた武士道観は、或は、

古くさい、といわれるかも知れない。しかし、これは、戦国以来、身につけてきたもので、どこまでも通用する「大道」だ、と考えていたのである。それだけに、たとえ、江戸詰家老からの申出であろうと、きっぱり拒絶し、取り合わなかったのである。そして、この顛末を国もとの筆頭家老伊木伊織に申述べ、さらに、取りなしを要望した。

伊織は、いうまでもなく古参派の頭取りである。新参派が小川四郎右衛門を頭として団結するなら、古参派は伊木伊織を軸としてまとまらねばならぬ。伊織は、これらの物頭から報告と依頼を受ける、さっそく、小

川四郎右衛門に向かい、組頭たちのきめた処断が適切であることを送り、今さら、これをくつがえすことのない旨を強調するとともに、別所六左衛門に対しても、その理由を説明し、それを、すなおに受けることができよう。この伊織のとりなしに對

創業嘉永元年 きものと共に130余年  
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)  
☎(0790)62-1680代



し、積極的に反論しなかった。正面きって論争しても、議論の上で勝てるとは思わなかったろうし、下手に、ことを荒立てれば、それこそ、別所六左衛門の行状を批難される結果になることもわかっていただであらう。

したがって、ここで、こうしたトラブルをおさめておくならば、これで、一件落着、円満解決となった、と思われる。少くとも、そうしたことのできるチャンスが、この時点であった。

しかし、人間の欲望には、まことに恐ろしいものがある。たとえ、理屈に合わなくとも、道理にかなわなくとも、野望をつらぬかねば気がおさまらぬ、という我意、我執の亡者<sup>もどろ</sup>もある。また、そこへまでは行かなくとも、組頭が部下足輕に小銭を貸し、利子をとつたことがなせ悪い、と開きなおる人が居たかも知れぬ。

殿様に、そのことが聞こえたからといって、別に、恥ずることではない。部下の急場を救ってやったのであり、借入申込は、部下自身が自発的にしてきたことである。

決して、貸付けを強要したことはない。これを、「殿様の聞えがよくない」ということ自体、おかしい。

このような考えをもつものが、或は居たかも知れない。これが、新しい思想、道德観といえるかどうか、問題であるとしても、事実、こうした意見のもとに自己の立場を崩さず、頑迷に「貸した側の優位」を主張し、それを含めた処断を行うべきだ、と主張す

るものがあることも、亦、考えられぬ問題ではない。根底に派閥の対立があり、両者がひとつの事件を挟んで四つに組むような事態になってくると、時として、最初の問題から逸脱し、いわゆる事件のエスカレート化が始まることとなる。その結果、両者は、批難、応酬を繰り返し、憎悪が渦巻き、波紋が家中全体にひろがって行くのは、よくある例である。

江戸家老と国家老とは、車の両輪のごとく、協調し、協力して事に当らねばならないものであるにかかわらず、両者が、こうした関係に立つようになったことは、山崎藩池田家にとって、まことに不幸な事態といわねばならない。

## 山崎六地藏物語 青蓮寺地藏の巻

山田町、青蓮寺境内の小さなお堂の中に、水をつかさどり罪、穢を洗い清めて下さる「浄行菩薩」がおまつりしてあり、近在の人たちは、この菩薩を、青蓮寺の地藏さんと呼び、親しんでいる。

お地藏さんは体長四十一センチ、蓮華台に立った合掌姿の石像。何時ごろ境内におまつりされたのか記録は残っていない。現在の地藏堂の建立は大正十年四月らしく、台石に世話人名、お堂内に張り付けられた板に浄財名簿が墨書されている。

古老の話によると、青蓮寺のお地藏さん、は、昔から目、耳、鼻、舌など、のどから上の病気をなおして下さるお地藏さんとして多くの人たちの信仰をあつめ、宗派をこえて善男善女のおまじりが続いた。お地藏さんにお水とお花を供え、病気をなおして下さい」と心を込めて、願かけをすれば、その霊験はあらたかだという。

昭和四十三年ごろまで地藏盆の八月二十四日には、お地藏さんにだんごやお菓子を供え、境内広場を色ちようちんと竹ささで飾り付け、日暮れを待って盆踊り大会が催された。広場には近在の老若男女が多数詰めかけ、深夜まで踊りを楽しみ、仏を供養した。

## 戸原物語

(一) — 高瀬舟と馬力 —

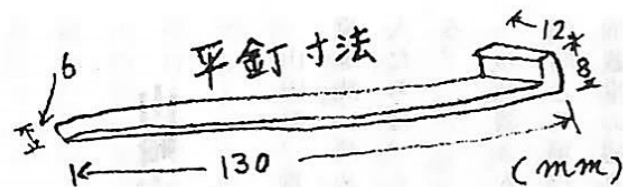
志水出世

わしの親父さんは舟大工じゃった。宇原橋のちよつと奥の岸の広場が仕事場で、わしの子どもの頃よく見に行っていた。割合大きいもので、七間（十二・六メートル）はあったのう。杉の柱の五分板を平釘で止めていた。

幕末には宇原にも二十五艘、川戸にも十艘もあったそうじゃがわしの子どもの頃は二十艘位になっていたようじゃった。

山崎出石より網干まで上りが十里（約四十キロ）下りが七里と言われていた。

一艘に三人乗りこんで下っていた。



その日のうちに網干まで行き、竜野あたりまで帰って一泊、次の日昼ごろには宇原まで帰って来ていた。帆も張っていたが、二人は川岸を綱を曳っぱりながら

の大変な仕事やった。一人は舳先で竿を使って舵を取るんじや。今でいう船長さんやな。海では航路というが川では舟道といつてな、通り道がある。大水が出ると砂や石でそこが浅くなる。わしも川さらえの賃かせぎをしたもんじや。

その頃は、筏も一しよに流れていたなあ。上野の辺から流されるんや。

舟の荷物は宇原には殆んどない。山崎の出石まで積みにあがらにゃ仕事にならん。荷主は山崎に三木屋とか榎屋ますやというのがあった。帰りはあんまり積んでいたようではないが、下りはだいぶん

外科・内科

# 山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL⑥20036

積んどった。なんでも五〇石（七・五トン）位はあったようじゃ。宇原に二十艘として六十人が舟に乗っていたことになるが、ところがわしが学校を終える頃には、だんだん街道がよくなってきたな、親父の言うには「もうやがて高瀬舟も終わりじゃ。車力や馬力の時代になってまいよる。」

おまえも舟はやめて、馬力を引いて時代の先取りをしたらどないや。」と。わしも考えた。舟は三人乗って網干まで往復二日ばかりや。馬力なら馬と二人で日帰りできる。そして馬力には、六月、九月の川止めもない。よし馬力を引いてみよう。

そうして、馬力運送業を始めたんじゃ。宇原にや、いたやん、音やん、さきつつあんとか五、六台あったようじゃった。よう姫路へ行ったもんじゃが、あの追分峠の下にはなあ、若い娘さんが牛をつれて待っとんじゃ。馬一匹では上がらんでな、その牛と二頭だてで引っぱるんじゃ。勿論何がしかの金は払うんじゃが、こちら



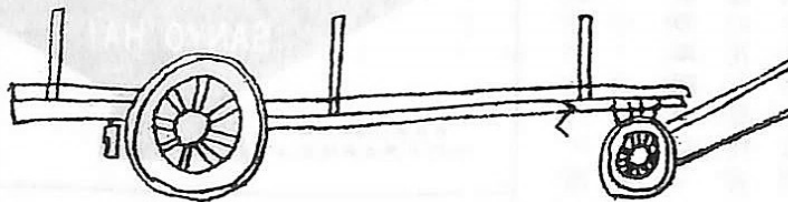
もあてにしとんじゃからなあ。

姫路行きとなると、日帰りは無理や。帰り猪崎辺で泊るんじゃ。大国屋というのがあったなあ。馬はなあ、よう調子が狂うんじゃ。病氣したり、足痛めたり、牛より足速うていいんじゃが、牛ほど病氣や怪我に強くない。値段は牛より少々高かったかな。

当時は金車と言って鉄の輪（タイヤのかわり）が入っていた。それが通る所は砂がきれいになって、舗装したような道やった。勿論この辺にゃ舗装なんて道は一つもあらへん。道路人夫さんが毎日出て、コンクリで囲まれた土置場、今でも宇原橋のちよっと下にあるやろ、そこから砂など出してひいたり、ツルハシ、ジョレンで補修していたが、それでも穴ぼこもあったし雨のあとぬかるんで、はまをとられて困ったこともあったもんじゃ。

積荷と言うたら材木、板、柱の様なものが主やった。そのころの若衆は下の方（新宮、竜野方面）へ素麺などしに稼ぎに行ったもんじゃ。水車行きと言って灘の方へ酒米つきに行っていたものもある。

馬力引きは、皆力持ちで、俵二俵（百二十キロ）は両手に下げて運んだもんじゃ。このじげの中筋さんの前の道の広い所に、





力石というのが置いてあって、五斗、七斗、八斗、一石とあったようじゃ。それを若衆が担ぎ合いをするんじゃ。まあ八斗石（百二十キロまで位はわしも担いだが、この辺にゃ、わしより強いのはいなかった。一石石がもてたら播州の豪傑じゃということになる。どこかに元氣もんがいて、高下駄はいて、縄もかけずに担いだということを聞いたことがある。真偽の程はわからんが、そのようにして幻の英雄にあこがれたということかな。

大正になると、この辺にも貨物自動車、そうじゃ、今というトラックが走り出すようになった。トラックはめっぽう速いが、運賃から言うと、馬力よりうんと高い。それでも昭和になると、ますますトラックが増え出して、筏も、高瀬舟も姿を消した。戦時中一時期、筏が流されたことはあったが、馬力も減ってきた。

高度経済成長期の三十年半ばには、一台もみられなくなった。今、高瀬舟の杉板が出口さんとこの板壁になって残っている。

語り 宇原 投元 戸市（九一才）

構成 戸原小 志水 出世

一九八六・一二・一五

# 大歳神社と千年藤

長川耕一

大歳神社の藤は、天徳四年（西暦九六〇年）に、上寺の与右衛門

門が、植えたと伝えられている。

「千年藤」と呼称されるようになったのは、兵庫県社寺課の記録によると明治の始めごろといわれている。

与右衛門の遺徳と、その意志を守り伝えた人びとを偲び、千年藤記念碑が、有志により明治四十五年四月十五日建立されている。

氏子は、上寺、寺町、紺屋町、伊沢町、富士野町、鴻ノ口、旭町、大歳町、の八ヶ部落である。

大正、昭和にかけての「藤まつり」は、芸者衆の舞踊、素人芝居が色彩を副えて大変賑やかであった。また藤の花も見物客の頭に触れるほどで、一米余（三尺〜四尺）の長さで古者は語る。

藤棚は語らないが、戦中は、多くの出征兵士の門出を見送り緒戦の勝利を祝う、焔灯行列、旗行列の集合場所となっていた。戦後の混乱期も、私たちの眼を楽しませ、心をなごませてく



れたものである。

昭和四十七年三月「兵庫県文化財天然記念樹」の指定を受けたが、先輩諸氏の、育成、保存の努力が報いられたものであろう。

藤棚の面積は、約三〇〇平方メートルで、現在三本の藤で賑わしているが、中心の千年藤の幹周りは、約二八〇センチ、である。

藤の手入について

一、施肥 六月、十月、十二月

(一回の容量) 油かす 二〇〇キロ

野系化成 二〇〇キロ

二、防虫 八月、二月、必要に応じ追加

三、剪定 十一月

施肥は、上寺の横治誠一さん、小林春市さんの研究、努力により成果をあげている。

私たち世話人一同は、この山崎町の宝物を守り育て、後世に委ねる責務を痛感しており、皆様方のご指導をも得たい。

大歳神社の祭神について

建立期は不明であるが、欽明天皇時代(西暦五四〇年)ではないかといわれている。

大倭物代主神社(下牧谷、原宮司)の末社である。

大歳之神 農耕の神 須佐之男命の御子。

上筒之男命 航海の神 伊沢神社の金比羅さんとして親しまれて

いたが、神社統合の法律により大正七年合祀された

善覚稻荷大明神

稲倉魂神 商売繁昌の神

秋葉神社

火之迦具土神 火防の神

山崎藩の古文書によると、一七〇〇年代に四回もの大火が発生約五〇〇軒が焼失

また六代目本多忠居侯時代の、一八〇七年から、一八五八年のわずか五十年間に、武家屋敷、町家など約二〇〇軒の焼失とある。

たびかさなる大火のため、安政三年(一八五六年)に遠州秋葉大権現の、ご分身を受け、船越山瑠璃寺を、祈禱所としていたが後上寺薬泉寺が「守護所」となり、明治の初めまで続いていたもので、大正二年四月、上寺薬泉寺から法律により合祀。

大火の記録

宝永元年(一七〇四年) 福原町から出火、六ヶ町被災

宝永七年(一七一〇年) 被災二〇二軒

享保四年(一七一九年) 被災一七二件

明治元年(一七六四年) 紺屋町伊沢町、四十八軒焼失

文化四年(一八〇七年) 山崎藩邸焼失

文政五年(一八二二年) 富士野町大火

弘化三年(一八四六年) 伊沢町(二月二十八日)

嘉永三年(一八五〇年) 出水町、寺町、紺屋町、伊沢町、山田町

安政二年(一八五五年) 本町西町、武家屋敷被災六〇軒

安政五年(一八五八年) 武家屋敷被災十九軒

(注) 大歳神社の祭神についての稿は、故入江静夫氏(前千年藤

保存会長)の調査記録によるものである。

## 木曾路研修旅行記

事務局長 安井 清介

実栗郷土研究会から山崎郷土研究会に改称となり、山崎郷土会報として発刊されて昭和六十二年は十五周年に当り、郷土研究会の研修旅行は日帰り旅行を実施してりましたが、秋は一泊旅行を実施することになりました。

研修部会に於て検討された結果、江戸時代の街並みを今に残す木曾十一宿の中「妻籠」と「奈良井」の宿場町の見学と、木曾義仲の菩提寺である木曾福島の興弾寺を訪れ、更に翌日は諏訪大社と松本城の見学が計画されました。一泊旅行は初めての試みの為(日帰り旅行の場合はバス三、四台)バス二台を予約しておりますが、参加希望者が多くなり一台追加してバス三台にて約一三〇名参加される結果となりました。

十月二日(金)前日の雨もあがり晴天に恵まれて午前七時山崎を出発して中国道、名神、中央道へ入り、土岐ICを出て美濃焼ランドにて「せいろ弁当」で昼食をいたしました。美濃焼きの土産物を早くも買っている人もありました。再び土岐ICから中央道に入り、この地方も稲刈りは終わっていません。中津川ICをおりて妻籠宿の町並みを見学した。

時間の関係上脇本陣「奥谷」郷土館の見学はできなかったが、御高札場、枳形の跡、口留番所跡等を見てカメラのシャッターを切っている人達も見かけた。研修旅行の葉が配布されていない車があつて慌てたが、出てきたのでよかったです。今後の反省点にしたいと思つた。

妻籠から次は木曾福島の興禅寺へ参拝した。「看雲庭」という石庭を拝観した。この庭の白砂は京都の白川砂で地模様を作つて雲紋とし、石は瀬戸内海沖島産の緑泥片岩だそうです。木曾義仲の遺髪を葬る宝篋印塔へもお参りした。美味しい

お茶のサービスまでしていただき更に奈良井宿までもお見送りいただきご厚意に感謝いたしました。

奈良井は「奈良井千軒」と唱えられ、木曾路最大の宿場町として栄えた所です。ここも時間がなくて町並みを見学した程度で「上問屋資料館」「大宝寺」「マリヤ地蔵」等々の見学もできず残念でしたが、五平餅を買いに

食品の店

いまや

さつき通り4丁目  
TEL ②0169



入って「おいでなんしょ」と娘さんの笑顔に迎えられた人もあるかも知れません。私は先年学校厚生会の研修旅行で奈良井の民宿に宿泊して翌朝奈良井駐車場の近くにある鎮神社に集合し、ここから海拔一一九七米の鳥居峠を徒歩で越えて蕨原までおりました。前夜奈良井に降った雨は鳥居峠では雪となって積っておりました。頂上には木曾御岳の遥拝所があったことを記憶しております。

塩尻から下諏訪温泉に向かう頃にはすっかり日も暮れて三号車から他のバスへの無線連絡がうまくいかず運転手さんが困惑されておりましたが、予定より約五十分遅れて六時半頃諏訪湖畔の望月桜に到着いたしました。

六階の大浴場で旅の疲れを流し七時半から一階の大宴会場にて宴会がありました。大広間は約一三〇名のお膳が並び壮観でした。堀口会長の挨拶の後、久保副会長の音頭で乾杯した。宴もたけなわとなって水谷氏の司会で隠し芸が披露された。「木曾路の女」の歌詞を希望者に配布した。宴会は九時前頃に終了した。

翌十月三日も快晴に恵まれ朝食までに諏訪湖畔へ出てみたら中学生の漕艇部の生徒が湖にボートを出して練習をはじめていた。望月桜を八時三十分に出発して下諏訪神社に参拝した。御柱祭で有名なお宮で出雲大社のように大きいしめ縄が飾られていたことが印象的だった。

下諏訪からバスは北上して松本市に向かい国宝松本城を見学した。五重六階の天守閣に登ると遠く槍ヶ岳の頂上が見え、松本市街を一望することができました。乾小天守と辰巳付櫓、月見櫓を

付帯し、平面的にも立体的にも変化に富んだ姿を保ち、わが国の城郭建築中でも特に重要な位置を占めています。

松本城の見学を終わって帰途につき塩尻ニュークランポンで昼食して帰路は岡谷ICから中央自動車道を南下し、総延長八四八九米の恵那山トンネルを通過して小牧分岐から名神高速道に入り、草津、社で休憩して予定通り午後八時に山崎へ帰着した。

二日間晴天に恵まれ一人の事故もなく初めての試みとしての一泊研修旅行が終了したことは参加された皆様方のご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。六十三年度は春は日帰り旅行、秋は一泊旅行が計画される予定になっておりますので皆様奮ってご参加下さることを期待いたします。

尚、旅行に関するご意見ご要望等がございましたら遠慮なく事務局へお申し出下さい。今後の旅行の参考にさせていただきます。

## 蔵書活用について

事務局

郷土研究会には下記の蔵書があります。会員の皆様方には精々ご利用いただくようお願いさせていただきます。貸出しについて後部に記しておりますのでご覧下さい。

### 郷土研究会蔵書一覧表

63. 2. 1 現在

書 名	著者又は発行所名	備 考
兵庫県史 古代一	兵 庫 県	
兵庫県史 古代二	兵 庫 県	
播磨国鑄物師考	武 内 貞	安 井 寄 贈
播磨風土記	寺 本 躬 久	
月刊 歴史手帖 87年1月、4月号	名 著 出 版	
民俗文化280号	滋賀民俗学会	
歴史と神戸25巻 3号 1. 明石地名考 2. 宍粟郡における村名の変遷 3. 吉田茂樹「ひょうごの地名」の二、三について(三) 4. 兵庫県地名研究会の結成について 5. 長田の石造遺品を訪ねて  歴史と神戸26巻 1号 1. 一ノ谷合戦に係る関係してのメモ 2. 近世初頭の石工と石持 3. 居留地警察の系譜 4. 「4・24」教育闘争のC級裁判 5. 本屋冥利 6. 播磨徳育会について 歴史と神戸26巻 2号 1. 最初の徴兵と臨時徴兵 2. 神戸左翼文化運動史 3. 「米地谷」にかかわる事々	神戸史学会	

書名	著者又は発行所名	備考
歴史と神戸 26巻 3号 1. 赤松政則 2. 半済令と播磨国一撥 3. 赤鹿雪山について 4. 地名研究 22	神戸史学会	
神戸史談 257号 1. 神戸史談会の先人点描 (一) 2. ガワー兄弟と神戸その他 神戸史談 258号 1. 赤松円心則村 (一) 2. 初代神戸市長鳴瀧幸恭氏から初代市会議 長神田兵右衛門氏への (秘) の手紙 3. 仏足石の礼拝について 4. 兵庫のハウソ医・神沢氏 5. 古代の信仰雑記 6. 明治の神戸一駒 7. 神戸史談会の先人点描 (二) 8. 神戸の芝居小屋 (一) 神戸史談 259号 1. 神戸市域出土の漢式鏡 2. 楠木正成 (一) 3. 赤松円心則村 (二) 4. 「神道津和野教学をめぐって」 5. 讃岐別所家と三木法界寺	神戸史談会	
刀田山鶴林寺	島田 清	
少年 61号 62号	寺本 躬久	
民俗文化 255号 288号	滋賀民俗学会	
兵庫紙幣史の研究 創刊号 ~ 第5号	兵庫紙幣史編算所	
兵庫の銅鐸	県立歴史博物館	
歴史手帖 62年5月号より63年1月号まで	名著出版	
神戸史談 260号 1. 兵庫県下の庚申塔 (上) 2. 楠木正成 (二) 3. 赤松円心則村 (三) 4. 西代史話 (二)		



書名	著者又は発行所名	備考
<p>5. 郷土の力士                      6. 神戸の芝居小屋 (三)                      7. 神戸史談会の先人点描                      8. 兵庫の医家神沢氏その後 (一)                      9. 神戸開港百二十年祭                      神戸史談 261号                      1. 神戸開港の経緯                      2. 神戸沖海戦と五代友厚                      3. 伊藤博文と神戸                      4. 明親館の設立                      5. 居留地                      6. ヴェーダーの見た幕末                      維新期の医学の実情                      7. 神戸開港年表                      神戸史談 262号                      1. 神戸開港と神戸事件                      2. 坂本竜馬の絶筆と暗殺の危険を感じて                      いたことを証する書状発見                      3. 楠木正成 (三)                      4. 赤松円心則村 (四)                      5. 平野「雪見御所」に関する諸問題について                      6. 兵庫の医家神沢氏その後 (二)                      7. 西代史話 (三) 高取山</p>	<p>神戸史談会</p>	
<p>歴史と神戸 26巻                      4号                      1. 尼崎の広濟寺は近松門左衛門とは深い由                      縁はなかった                      2. 淡路島の海の生産用具                      3. 淡路国分寺について                      4. 兵庫北関入船納帳の淡路船について                      5. 近世淡路の海運を探る                      6. 津名郡大字名全解                      歴史と神戸 26巻                      5号                      1. 特異な構造の石室群                      2. 温泉寺縁起についての一考察                      3. 但馬の田公氏について                      4. 但馬における織豊政権時代の検地                      5. 明治維新の高札                      6. 但馬の幕末期伊万里系磁器窯                      7. 中和邸の庭</p>	<p>神戸史学会</p>	

書名	著者又は発行所名	備考
8. 但馬地方神社ノート 9. 検証・坂本竜馬の書状 歴史と神戸 26巻 6号 1. 赤穂藩浅野家改易後の赤穂郡の村々 2. 御城瓦師大古瀬氏の系譜・その後 3. 播磨姫路藩御抱え力士 4. 姫路市旧的形村小字名 5. 「野々」地名考 6. 検証・坂本竜馬の書状	神戸史学会	
播磨全6冊	京都市 臨川書店	
悪魔の飽食	森村誠一	安井寄贈
隠された聯隊史	下里正樹	安井寄贈

### 蔵書の貸出しについて

- 一、郷土研究会の会員にはどなたでも貸出しをいたします。
  - 二、貸出しを希望される方は、事務局へ電話又は文書にてお申し込み下さい。
  - 三、貸出しは無料ですが、紛失または損傷の場合は相当の弁償を願います。
  - 四、貸出しは一回三冊以内といたします。
  - 五、貸出し期間は一ヶ月以内といたします。
  - 六、図書貸出簿に図書名、氏名を記入し捺印をお願いします。
- ◎ お願い
- 一、図書の寄贈をしていただける方は事務局へお知らせ下さい。
  - 二、図書購入のご希望がありましたらお申し出て下さい。
  - 三、図書貸出しについてご意見、ご希望があればお申し出て下さい。

# 祝 創刊三十周年記念

一、挨拶	……………	会 長	……………	堀口春夫
一、祝 辞	……………	名誉会長	……………	安井淳三
一、所 感「余生をいきる」	……………		……………	高野 薫
一、所 感「郷土研究会に望む」	……………		……………	野上久男
一、随 想「篠の丸登山について」	……………		……………	瀬畑正弘
一、随 想「小茅野の里」	……………		……………	福井益男
一、随 想「土万地区における大福寺跡を憶う」	……………		……………	赤松善之助
一、随 想「大河ドラマと武田信玄」	……………		……………	安井清介
一、会報創刊号全巻	……………		……………	

## 挨拶

会 長 堀 口 春 夫

春爛漫の好季節となり郷土研究会の皆様方には御健勝にて、それぞれ御活躍されていることとお喜び申し上げます。顧みますと郷土研究会は昭和三十三年再発足以来今年で丁度三十年に当たります。その間絶える事なく連綿として継続して来ましたことは、これ偏に皆様方の熱意あるご協力 によるたまものと深く感謝する次第でございます。発足致しました当初は会員も二百人足らずの有様でしたが年毎に漸次増えて行き、今では六百七十人からの大団体となりました。私達は吾々先祖が努力して築き上げてきた郷土の文化と歴史的遺産を大切に守り続け、又よりよき町づくりと住み良い郷土を築く為に努力していかねばならないと思っております。その為には研修旅行も続けて他所の良い所も見習い取入れて研究を積み、会報を通じて色々の意見の交換をしたり、発表をしてよりよき郷土づくりに貢献していきたいと願っております。どうぞ皆様この会を一層盛り立て、絶える事なく継続し、皆で協力下さいますようお願い致します。

## 祝 辞

名誉会長 安 井 淳 三

会報創刊三十周年をお祝い申し上げますと共に、会員の皆様のご活躍を心からお喜び申し上げます。



さて、既に皆様ご承知のとおりで今更申すまでもございませんが、山崎町は県西部の中国山脈の山懐に位置し、昔から山陽道と山陰道を結ぶ交通の要衝として栄えた城下町でございます。今もなをそこかしこに往時が偲ばれる城跡や町並みは私たちに深い感動を与えてくれます。そして緑豊かな山々からは豊富な山の幸を、清流揖保川からは水の恵みをうけ、数多くの歴史を積重ねてまいりました。

その大自然の恩恵をうけてまいりました当町に、人が住いするようになったのは、菅野や神野地区から出土した土器からでも解明されております。これは、およそ二千年程前からと聞きおよんでおります。

そしてその当時の町民の暮らしぶりも、各地にございます歴史資料により偲ぶことが出来ます。また古き時代を回顧いたしますとき、当町の生い立ちがどうであったか振り返らずにはいられません。

そこでその経緯をみてみますと、当町発展の基盤は天正年間にさかのぼります。

当時の竜野城主でありました木下勝俊の「新町申付」と慶長年間の姫路城主池田輝政の「市日の定」によるものと聞きます。その後、池田氏代から松平氏代にかわり、また池田氏代となり、宍粟藩として延宝年間になって本多氏代となったのでございます。

本多氏代の手腕は高く、現存の町並みからして城下町としてそして商業の町として、その条件を充分駆使して構成されている

ように拝します。また、飢饉に見舞われた時は町民の安住と、平穏を祈願するために伊和神社に献刀されております。いわゆる町民想いの本多氏代の人柄が今の世にも語り継がれている所以であると思えます。

このようにたくさん歴史を経て、明治二十二年に町村制施行となり、宍粟郡の中心地として大きく山崎町が移り変わったのでございます。昭和二十九年には旧山崎町と菅野村が合併し、昭和三十年に城下・河東・神野・戸原・土万・葛沢の各村と大同合併し、県下最大の町となりました。

前述の通り豊かな山の恵みで木材を主要産業として栄えてまいりました。しかし時代の推移と共に、今は各種企業の進出と、それに伴う各種産業の活動がめざましく、大きく変遷しようとしております。

山崎町は町民憲章に掲げております通り、明るく豊かな町づくりに取り組んでおります。それがためにお互いが信頼し、信頼され、何でも話し合える対話のある町に脱皮したいと考えております。

郷土研究会の皆様、新生山崎町のために、いつでもご来庁下さりご意見をたまわりたいと存じております。どうか町政発展のため、町民の幸せのためによくご支援下さいますようお願いいたします。

最後に郷土研究会の益々のご発展と会員の皆様のご健康とご多幸をお祈りいたしましてご挨拶いたします。

## 余生をいきる

高野 薫

人生にはいくつかの筋目があり生き方を変える出来事がある。

今年来た年賀状の中に「君は良い事を始めたうらやましい。八十四才になる私にはもう何も出来ん。もっと早く気が付けばよかった」とこんな事が書いてあった。私が今の様な生活に変わったのは五十七年秋、入院中に娘が見舞いにくれた俳句の書籍であったその中に次の様な事が書いてあった。

俳句を始めるのに恥ずかしいとか、てれくさいとか一切思うこととはない。何事も最初からうまく出来るものではない。野球にしても、水泳にしても同じで、もし近くに句会があれば入会しなさい。先輩は心より歓迎し親切に教えてくれるから……と。

私には幸い和田疎人先生という四十年近く前より親しく交際を願っている先生があるのにと思い退院後早速お世話になることになり、学識経験豊かで温厚な先生のご指導を受け、また親切な先輩の皆さんと共に岩見梅林、五百羅漢、フラワーセンター、牛窓港、柿衛文庫等々吟行し月々の句会も先生をかこみ句友の皆さんと楽しみつつ早四、五年がすぎ去った。

ところで、あまり秀句も作れないのに今度は色紙に自分で俳画を書いてみたくなり絵の先生を探している時、八幡さんの夏祭りでの準備中同じ宮総代として来ておられた横江伯峰先生を根岸

さんの奥さんより紹介されたが、伯峰先生とは十年程前よりゴルフの練習場でお世話になっておる間柄で、先生の明朗で磊落な気性になんの躊躇もなく心易く入門をお願いしたところ即座に快諾を得て入門した。

以来、一年余り俳句も同様な年取ってからの習い事、なかなか思う様に筆は運ばないが、親切な皆さんに助けられながら俳句、絵共に始めるのがおそかったとはいえ、友人の賀状の様に八十四才までにはまだまだ十年もあり、私の老後もこれからだと、最近植物同好会にも入れて頂き、又々立派な先生にお世話になる様になった。昆虫館長の内海功一先生である。

先生は昆虫や植物、その他歴史に対しても豊富な知識を持っておられて、月一回の勉強会に山野を歩き心地良い汗を流し、又室内ではスライドでの勉強等、私達を導き楽しませて頂いている。私の老後はそれぞれ良き師、良き友を得て力いっぱい楽しい日々を送れることをよろこんでいる。

過日、実生の寒椿の鉢植えをある先性<sup>女</sup>に贈ったところ、段々大きくなり鉢も一回り大きくして花の咲くのを楽しみにしているとの便りがあった。こんなことも老後のたのしみの一つと思ひ花の便りを楽しみにしている。

テレビや炬燵の留守役にならず、大いに外に出て太陽を友に元気な老後を一層豊かなものにしなさいと念願している。

## 郷土研究会に望む

野上久男

新しい年を迎え御目出度と同時に本年は郷土研究会の会報創刊三十周年に当り誠に意義深いことと思うと同時に、今や世は二十一世紀に向って国内各界はあらゆる部門に推進突進すべき年であります。県下三田市では公園都市博覧会を実施し、また西播磨に於てはテクノポリス団地も着手されており、新しい未来の郷土作りに進んでいる現状です。わが郷土研究会は、昭和初期より創設され、以来年々山崎藩の旧跡を掘り起し標柱、石碑等建立し各部門にわたり研鑽され、足跡を残しており、他面には毎年県下は申すに及ばず他府県へも研修旅行を実施し、各部門の研修を計り、多大の収獲を得て益々発展に寄与している現状であるものと信じ喜ばしきことと存じます。

願わくは、わが郡は挙げて特に山崎町は郡の中心地ともなる地域に位しており、県下は申すに及ばず他府県より郷土の研修の対象となる大山崎町に一日も早く到達すべく町を挙げて郷土愛に燃えんことを念願するものであります。

## 篠の丸登山について

瀬畑正弘

永年にわたって、毎朝登山しているが、山の姿は一日として同じ景色であったことはない。

ある日は悲しそうに、ある日は嬉しそうに又、ある日は怒っているように……。

しかし、山そのものは、昔と少しも変わらない美しい容姿で静かに私達の故郷の街を暖かい目で見下ろしている。

山に登る人の心は、山の景色のように変幻自在に富んでいる。又、孤独な面が多い。

坂道での短い散策の中で山の美しい自然の景色にとけこみながら、昔の懐かしい思い出を呼び起こし、いろいろなと頭の中で修正してみる。そして修正後の自分の像が理想だったなあ……と思いつながら下山した途端に現実にかえり、ガッカリもし又、あきらめがついて、平常の生活のリズムにかえっていく。朝から車の騒音が激しい昨今の街では、山でのひとときは、昔を思い出させる天国のひとときであり、過去の故人にも空想のなかであえる貴重なひとときでもある。

最上山の登山ぐちに、次の俳句の碑が建てられています。麦笛や夕靄町の灯を包む「鐘が鳴ります日に三度……。」の山崎小唄とともに、昔懐かしい故郷の街、山崎を思いおこさせてくれます。又、この思い出を子供や孫たちの新人類にも引き継がれるよう望んでやまない。

# 小茅野の里

福井 益男

位王神社の鐘撞堂に立てば、上小茅野が一望でできる所にあったが、現在は宮の境内に移動してある。この梵鐘が活躍したのは大正八年八月の昼下り無人の小屋から出火し猛火となり類焼に次ぐ延焼となり、十八戸の内十五戸が全焼し三戸のみが難をまぬがれた。今見えるのは大正、昭和と六十七、八年前に建てられた家屋であり東側に有る二戸は三百余年間風雪に耐えた家屋である。

拜殿の右側に歌舞伎芝居のできる廻り舞台があつて田舎芝居が見物できた。今は土台石がその儘に残っていて惜いことである。

梵鐘の刻字を読むと。

播州六粟郡小茅野区民神

位王大明神御宝前供鐘

素戔鳴尊御子 田心姫尊

菟津姫尊 一杵埋姫尊

九三女疾神中 勅許治工



大阪御代官岩佐郷藏殿 御願之則 寛政九十己年三月再鑄之 願主当村 氏子中 施主十萬助力 庄屋千石衛門 年当、助右衛門 諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂とありこの宮も梵鐘等からみると神仏習合の神社である。日本では仏菩薩は神の姿で現われたとして神仏を共に奉祀する風習となったが、明治政府の一部国学者は 天皇の神権的權威を唱えるとともに国粹思想を採用して習合を廃し仏教的神号をも廃したと聞いている。

山崎町史によれば神仏分離を行なった政府は神社の社格を決定し、明治六年岩田神社(下比地) 中山神社(中) 位王神社(小茅野) 五社神社(大沢) 四社を村社とし、明治七年八幡神社(門前) 貴船神社(千本屋) 大物代主神社(下牧谷) 野口神社(五十波) 四社が郷社となり明治三十三年八幡神社は県社となる。岩田神社(宇原川戸) 石作神社(須賀沢) 矢原神社(矢原) 桓武伊和神社(中野) 山神社(母栖) 松尾神社(土万塩山) 若西神社(青木) 産霊神社(塩田) 武田神社(三津) 明治十四年与位神社(与位) が村社となった。この社格の決定は記記神話の神統譜がその準拠とされたと記されている。

上記の社格からみても山崎町内の上位に認められている。小茅野の位王神社は安産と乳の神様として参拝者は多かったと聞いたし、尚、岡山千種周辺、内海、鷹巣、小茅野白口峠を越え萬沢の上ノを經由して山崎への重要な運送経路であったとそうだ。現在の県道大沢、内海線並に県道上郡、千種、鷹巣線は大正初期に造成された道路である。

旅行文学者宮崎修二郎氏によると、朝来郡生野に狭い土地だが多くの銀を産出し、白口千種、一宮町福知峽谷の白口峠、船越山白口峠、小茅



野白口峠上記と同様鉾石が出る所にあり、「白」修羅（しゆら）鉾石を乗せて引くための、その口ではないか。祖谷溪の、つり橋「カズラ橋」シラクチカズラで架け替えるが、これも修羅の口につけて引張る葛から出た名ではないかという。こうした鉾山地帯に白口が並んでみると今のところ修羅口と考へるのがよさそうだ。とあるように千種、鷹巣、内海、小茅野（後山）には鉾津が至る所にあることから鉾鉄、木炭等々あらゆる物資を修羅と肩によって運搬したことにより、白口峠の名になつたとも推察される。

上記に関連する事柄であるので一言、野々角の伝説について伝え聞いたことによると、大国（野々角）では男の子が特に育たないために、子供の成長に良好な新しい土地を求め、子飼野村と改めて転居したのが現在地である。

この事について大国牧場を尋ねた。牧場主の話によると、数多い墓石を一ヶ所に集石していたが現在では流土によって埋没していると聞き同行を願って現地を見た。自然木五本を残しその横に集石の形状を確認した。

牧場は波賀町との境界近くまで車道が通っている。途中二カ所で石仏が自然の儘で残してあった。伊沢川の最上流は淀みもなく清流であるが各車道には大面積上鉾津が随所に露出しているのを見ると当時鉾石の採集製鉄によって飲料水等に障害があり、子供の生育に関係したのではと思つた次第である。

尚野々角は小茅野村の土地であると主張して国と争つた事があると聞いている。

悲話 幸運を胸に秘めて遠い道も足し軽く彼の待つ野々角へ彼と手を取り合い嬉しさもつかのま、家人の厳しい言葉、はては罵声ともなり、行く道をたたれた。おのぶさんと云う人が野々角へ登りしなに見えた滝に投身自殺した。悲恋物語りによって名付けられた、「のぶが滝」である。このことからしても人の居住の証しでもある。

木地屋の住居はその後のことで、徳王寺と木地師との関係は山崎町史に触れられている。

## 土万地区における大福寺跡を憶う

赤松 善之助

土万地区は古地図によると推定慶長十年（一六〇五年）以前の各大字名は、現葛根は「桂根村」、塩山は「塩之町」「塩之村」と二つになっている。他は土万村、大沢村と各略字が使用されている。

往時より葛根及び土万の南部は、山崎より三河方面へと三日月への通路として人馬の往来が盛んであったと思われる。土万・塩山・大沢の一部は、塩地峠を経て千種の鉄、米、炭の搬出路であり、又山崎町より塩酢、衣料の移入路であり、美作後山参りの修験者の往還の道であった。

今回は塩山の太福寺の伝承について記してみたい。土万地区の地形上、寺は赤松一族の入山以前よりあったものと思われる。檀家は地区のほとんど全部であった。境内は塩山地内小字名の寺の前と東山の一部にかけて二五アール程である。

赤松氏が播磨を領有するに及んで一族の者が入山し、家老職は友延氏であったと伝えられている。因みにこの小字を寺地下と云う。

寺は寺務を保持しながら、一方現小字銀山の裏山に銀鉦を発見し銀の採掘に当たった。産銀は赤松氏の軍資金とするのが目的である。寺が銀鉦山を経営したと思推出来るのは、以前銀山村と称し寺側とは川を境にして一村をなしていたにも係わらず、坑夫等の墓が寺地下の西側川端から内側の現田地に多数あったのである。この地帯は元用水路と異った井堰をもっていたから当時はほとんど原野であったことは間違いないのである。昭和初年頃まで田の中に墓跡が三、四点在していた。我が家の母

は祖父の云いつけで毎年盆には川端の一ヶ所に川石を立て香華を供し周辺の無縁仏に供養していた。これらの事から類推して、当時隣村の坑夫の墓を寺の前に葬り建てたことから、大福寺が鉦山を経営していたことは確実と思考出来る。この辺りを今でも三昧と称している。開田前の墓地は一〇アール余はあったらしい。

徳川期に入って鉦山は

健康づくりの相談が気軽にできる店

# ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子  
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790) 62-1190

生野代官支配となり、維新後は個人鉦主が度々変り断続的に採鉦していたが、終戦後は休山となっている。

往時の大福寺はこう云う面を持っていたため秀吉に狙われたと思われる。天正八年秀吉の長水城攻略と期を同じくして秀吉の兵火により焼亡したために何等記録は残っていない。しかし、明治末まで境内を画した西と南側を杉垣を巡らし西南の角近くに五百年以上と思われる樅の大木が天を摩して立っていた。この内側に観音堂があり西側あき地に白椿及び曙つゝじの古木があったのである。

なお檀家は全部千種町室の西方寺へ委託されたのである。

昭和六十一年六月山崎郷土研究会が大福寺跡及び千種鉄の道の石碑を建立して下さって昔時の土万地区文化の一端を顕示されたことを感謝して筆を擱きます。

## 大河ドラマと武田信玄

安井清介

白黒のテレビが世の中に普及しはじめたのは、昭和三十年頃ですが、当時テレビは高価ですぐには買えませんでした。こども達は近所のお風呂屋さんのテレビを見せてもらいに行ったりしていました。白黒でなくカラーになったらよいと思っていたら約十年経って昭和四十年代からカラーテレビの時代に入り、今やハイビジョンの時代になりました。

NHK大河ドラマが昭和三十八年「花の生涯」からはじまって二十五年間、毎年楽しみに見てきました。ところが昭和六十一年「いのち」が

はじまって間もなく前年からの心労の為、急に心臓病を発病して郡民病院に入院の後、県立姫路循環器病センターに転院し、解離性大動脈瘤と診断され、四月二十一日手術をして術後の経過良好で六月六日に退院することができました。手術後しばらくは「いのち」を見られませんでした。入院していても個室でテレビがあつてほとんどずっと「いのち」を見ました。「いのち」が放映された年に「いのち」に関わる大手術をしたことは何だか不思議な気がします。

さて再びNHKのドラマの話にもどりますが、朝の連続テレビ小説も毎年楽しみに見えています。最近では「おしん」をはじめ「ロマンス」「心はいつもラムネ色」「濡つくし」「いちばん太鼓」「はね駒」「都の風」と昨年は「チョッちゃん」今年は「はっさい先生」も毎朝見えています。大河ドラマも昨年は興味深く「独眼竜政宗」も一年間見させていただきました。仙台で東北博も開催されましたが、機会を得ず行くことができず残念でした。今年は一月十日から「武田信玄」がはじまりました。皆様方の中には多くの方が見ておられると思います。六月二十三日（木）には杜山悠先生においでいただいて「武田信玄と戦国時代の人々」という演題の講演をしていただくことになっています。が、皆様方がこのドラマをご覧になる上で幾らかでも参考になることがあれば幸せと思ひこの随想をかくことにいたしました。学校厚生会の春季研修旅行の「武田信玄の舞台を訪ねて」に三月末頃参加する予定です。この旅行記は次回に皆様方にお知らせしたいと思います。

## 最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店  
良い品を・安く・安心して買える店



Specialty Camera Shop  
**コーエーカメラ**  
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089

武田信玄は大永元年（一五二二年）十一月三日、今から四六七年前、父の信虎が久島の戦に勝って、甲斐全土を掌握した年に生まれた。勝千代と名づけられたのは、その戦捷の記念のためであった。父信虎二十八才、母の大井氏二十四才の時の子供である。天文五年三月（一五三六年）元服して、將軍義晴の一字をもらって晴信と改め、大膳大夫兼信濃守に任ぜられた。信玄というのは二十八才で剃髪して徳栄軒信玄、法名を機山と号した。初陣は十六才、元服して今川義元の父、氏親の媒酌により左大臣三条公頼の娘を妻にむかえた。妻の姉は管領細川晴元の妻で、妹は本願寺法主、大谷光佐の内室である。この妻の縁からして後に本願寺・細川・浅井・朝倉などと結ぶようになる。

信玄が戦国時代の英雄といわれるわけは、彼がすぐれた兵法家であったからで、義経、正成とならんでわが国三大兵法家といわれているほどである。彼の兵法の特色は、一口にいえば「努めて戦わざるにあり」ということで、孫子の『戦わずして人の兵を屈するは善の善なり』ということを実

株式会社  
安井書店

90山崎町山崎郡栗共  
TEL山崎(02)0700(代)

行したのである。つまり、戦に勝つだけでなく動乱の間に処して、国土を統治する政治Ⅱ兵事を念頭に置いたところに彼の真面目がある。甲斐の武田氏は、守護から戦国大名に転化した名門であるが、そうした脱皮をとげたのは、信玄の父信虎のときで、彼は相つぐ国内の一族及び土豪の反乱を鎮圧して、一五一九年（永正十六年）居館を石和から躰躰が崎に移した。そして隣国信濃への進出を企て、そのため駿河の今川氏輝との提携をはかった。氏輝の死後、弟義元があとをつぐと娘を義元のもとに嫁がせて今川氏との関係を強化した。

日曜日毎に中井貴一の武田信玄が次々と戦いを進めてドラマは進展していきますが、武田信玄といえば川中島、川中島といえは上杉謙信を想い起すわけですが、この川中島の戦いが最も有名です。北信濃六郡を領有する坂城葛尾の城主、村上義清はおなじ清和源氏の流れを汲むものだが、源頼信から出て信州更級郡村上にすみ、のちに隣郡植科坂城の北葛尾に山城を築き、そこを本拠とした名族で、小笠原、諏訪などと鼎立する勢力だったが、やはり信玄に敵するものではなかった。信玄のためじりじりと周囲の出城を陥された末、天文二十二年八月（一五五三年）越後におちのびて謙信の袖にすがった。これを機縁として、謙信と信玄との宿命の対決が開始されるわけだが、義清の哀訴がなくても信玄の勢力が国境ちかくまで迫ってきた以上、謙信として傍観していられるはずはなく、両雄の衝突と角逐は、時の問題であるに過ぎなかったことである。

永祿四年旧暦の八月中旬は、太陽暦の十月はじめにあたる。高地にある信州北地の山野は、紅葉にうつくしく彩られる季節だ。謙信のひき



る一万三千の越軍が三手にわかれて春日山を出発し、国境の山々をこえて三道から川中島の前面善光寺平におしだしてきた。善光寺平には、旭山を先端にして越後の国境へかけ、謙信方の幾つかの城砦がある。それらの城砦にあつまつた越軍の主な内訳は、柿崎景家等の第一軍三千、それに大小の輜重隊と後詰の兵五千。中軍は謙信の二千人、第三軍は村上義清を頭とする北信諸將の遊撃隊二千五百ということになっている。それにたいして、南のかた千曲川の東岸松代に、甲州方の出城海津城があった。高坂弾正昌信の兵三千人がこれを守備している。越軍は後詰の五千人を善光寺にのこし、八千人を二手に分け、海津城の前方川中島と背後の追手の前をおしとおって八月十六日、千曲の対岸妻女山に陣をかまえた。妻女山は高さ百尺、三十米ばかりの丘陵で、先住民穴居の横穴などがある。海津城の西一里、四軒を隔て、千曲川の広瀬の渡にのぞみ、海津城を見はるかす位置にあった。

謙信あらわるの警報は、山々の頂に設けられた烽火によって、いちはやく甲府につたえられ、信玄は待っていたとばかり、二日後の八月十八日万余の兵をひきつれて甲府を出発した。途々はせ參じた諸將の兵をくわえて、一万七千人となった。

甲府から海津城までの道のりは、三十六里たらず、百四十軒余。春日山から川中島までの道のり十七、八里、七十余軒にくらべると、約倍にちかい距離だ。甲軍はその行程に四日をついやして、八月二十一日、塩崎についた。塩崎は妻女山の西南四軒、海津城へ二里、八軒の地点にある。信玄はそこに二十四日まで滞陣している。すぐに海津の城兵を合流しないのは、謙信方の動静をうかがうためだ。

信玄は北上の道中、海津城方と連絡して頻々と敵の情報をうけていたが、妻女山にどっしりと腰をすえて、一向に城攻めにとりかかろうとしない謙信の意中をはかりかねた。

情報によれば妻女山に到着した越軍は、山の中腹に二重、三重の空堀をほり、山木を伐りたおして棚をむすび、それに逆茂木をかけ、その中に仮小屋をたためぐらせて、長陣の仕度をしているとのことであった。用兵の神速をもって聞えた謙信が、すぐにも城攻めにとりかかろうとせずに、便々として俄造りの山寨にたてこもっているのは、一体どうした計略からであろう。城攻めには普通三倍の兵力が必要だとされているが、海津の城兵三千人にたいし、越軍一万三千の兵力は十分すぎるほどだ。にも拘らず謙信は城の攻略を敢行しないで、むしろ信玄が後詰に北上してくるのを待ちうけているのに見える。

信玄の計画では、海津城を囿にして越軍をおびきよせ、背後からこれに網をかけて一挙に殲滅してしまう考えであった。そのために信玄は、この春小田原城まで攻め入った謙信の留守を狙って、越後国境から謙信の領内まであらしまわり、謙信が怒って信州へおしだしてくるよう仕向けた。

はたして謙信は予期したように、関東から帰国した二か月後、信州へ出馬してきたが、さてその後の意中がわからない。妻女山にたてこもつたなり動かないのは、謙信の方でもまた信玄の考えとおなじく、妻女山を囿にして信玄をおびきよせ、何かを計画しているのではなかるうか。さもなければ、信玄の大軍が到着して前後をとりまかれ、袋の鼠となることを、わざわざ待ちうけているはずがない。

謙信の意中をはかりかねた信玄は、二十四日塩崎をうちたち、善光寺と妻女山の間をとりしきる茶白山に陣替えした。そこに陣取れば、善光寺に残されている越軍の後詰の五千と、妻女山の本軍の間の連絡をたち、同時に謙信の退路を扼すことにもなるので、いやでも謙信は行動をおこさざるをえまいとみなしたからだ。ところが謙信は、依然として腰をあげない。妻女山よりはるかに高い茶白山から見おろすと、越軍は陣中にともなってきた能役者などに舞をまわせ、笛太鼓をもって能楽に興じあったりしている。

しびれをきらした信玄は、五日後の二十九日、またもや茶白山の陣をひきはらって、海津の城内にはいった。そして諸将と軍議をこらした末、採用したのが有名な啄木きつぎの戦術である。高坂弾正を先鋒軍とする一万二千

の兵が、妻女山の裏手南西から攻撃して越軍を川中島へつつきだし、その前面に信玄の兵八千が待ちかまえていて、敵を一網打尽にする方略だ。

その計画を九月十日の朝、実行することになり

楽しいくらしのお手伝い

ホームセンター

**アザロ**

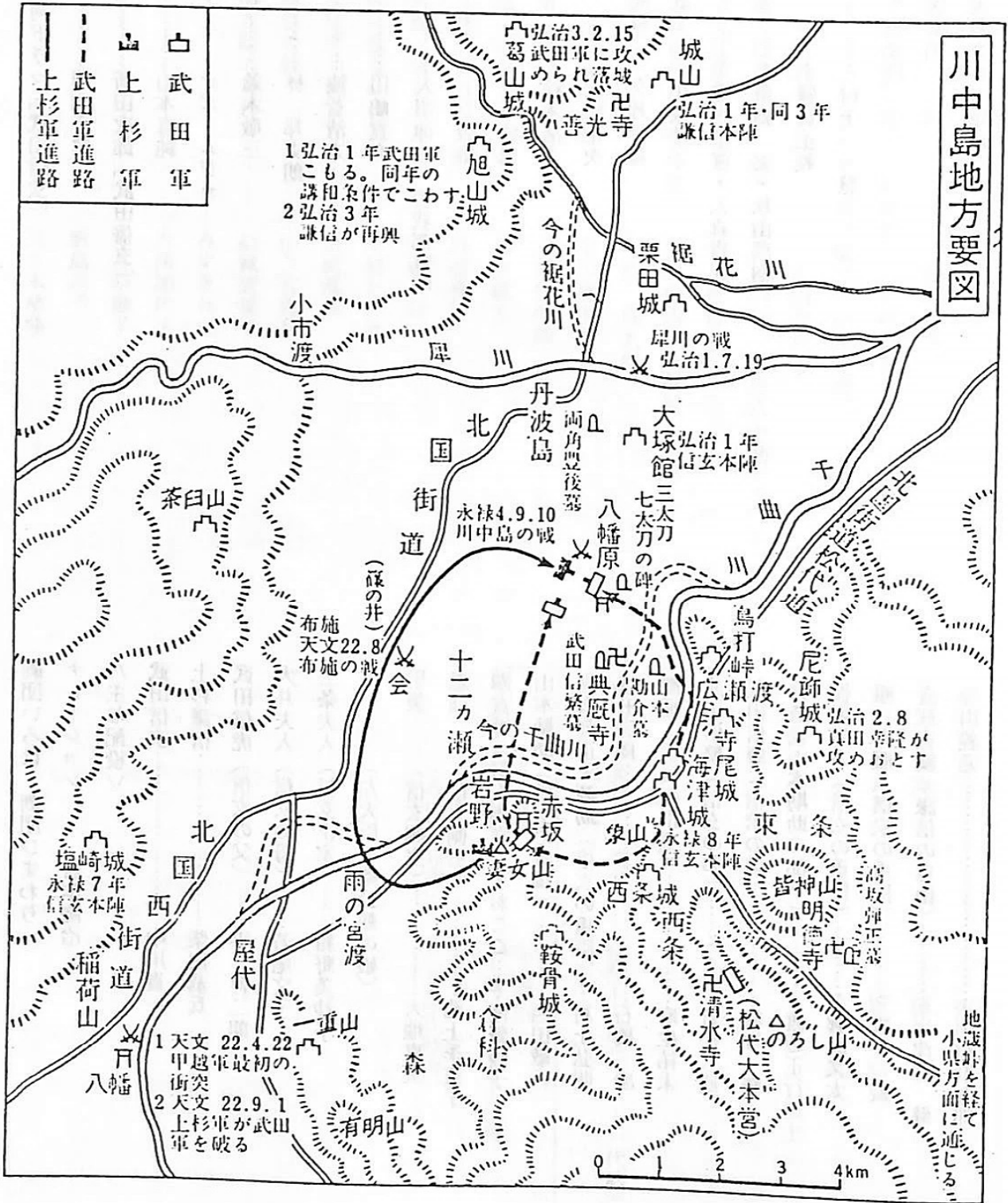
<p><b>竜野店</b></p> <p>竜野市竜野町富永 ☎(07916)3-3226(代)</p> <p>営業時間AM10:00~PM7:00 (定休日) 毎週水曜日</p>	<p><b>山崎店</b></p> <p>宍粟郡山崎町今宿 ☎(0790)62-2434(代)</p> <p>営業時間AM9:00~PM7:00 (定休日) 毎週水曜日</p>
---	--

った前日の夕、妻女山の高みから城内を偵察していた謙信は、各所からあがるさかんな炊飯の煙や、人馬のあわただしい動きによって、はやくも敵の計画とその出動をさとった。この信玄の出動こそ、彼が二十日あまり妻女山に滞陣して、待ちに待っていたところの機会だった。

謙信は十日の朝夜明け前に、ひそかに千曲川をわたって、川中島の中央八幡原、信玄が十二段の陣をかまえている背後にでた。信玄の軍は、夜のあけはなれるまでこれに気づかなかった。朝日の山の端にのぼる頃、甲軍がたちこめた深い川霧のかなた四、五町のところに、人のざわめきや、馬のいななきを聞き怪んでさぐってみると、思いもかけない敵の出現である。それに愕きあわてて陣容をたてなおす間もなく、越軍が怒濤のように襲いかかってきて混戦となったのである。

この乱闘のうちに信玄の弟武田信繁や隊將諸角豊後守、初鹿野伝五郎等を主に、四千六百全人が討死をとげ、信玄と嫡男の太郎義信も傷をおい、甲軍がまさに総崩れになるうとした時、謙信にすっぱかされた高坂弾正以下一万二千の兵が、妻女山から救援にはせつめた。

越軍方三千四百余人におよぶ戦死者の大半は、引揚げの際甲軍に追撃され、犀川の急流におちいって溺死したもので、戦闘は越後方完全な勝利だった。しかし、単騎敵の本陣をおそって、信玄に三太刀まで斬りつけたという謙信は、ついに『長蛇を逸して』最後の勝利をおさめるまでにはいたらなかった。





NHK大河ドラマ「武田信玄」

脚本……………田向正健

原作……………新田次郎「武田信玄」

音楽……………山本直純

演奏……………オズ・ムジカ

時代考証……………鈴木敬三

殺陣……………林 邦史朗

振付……………猿若清方

美術……………田嶋宣介

技術……………大沼伸吉・曾我部宣明

撮影……………上原康雄

照明……………佐野鉄男

音声……………鈴木清人

効果……………大和定次

編集・記録……………久松伊織

衣装考証……………小泉清子

演出……………重光了彦・大森青児

“……………布施 実・秋山茂樹

監修……………磯貝正義

制作……………村上 慧

NHK交響楽団

甲府放送楽団

若駒・大鳳プロ・早川プロ

劇団いろは・劇団ひまわり

ナレーション……………宮本隆治

△主な配役▽

武田信玄……………中川貴一

上杉謙信……………柴田恭兵

武田信虎（信玄の父）……………平 幹二郎

大井夫人（信玄の母）……………若尾文子

三条夫人（信玄正室）……………紺野美沙子

（左大臣三条公頼の娘）

里美……………（信玄側室）……………大地真央

恵理……………（信玄側室）……………池上季実子

湖衣姫（信玄側室）……………おここ……………南野陽子

山本勘助（信玄の参謀）……………西田敏行

高坂弾正・源助（信玄の重臣）……………村上弘明

織田信長……………石橋 凌

濃姫（信長の正室）……………麻生祐未

武田信繁（信玄の弟）……………若松 武

武田信康（信繁の弟）……………篠塚 勝

兵造（山本勘助の部下）……………渡辺正行

板垣信方（信玄の重臣）……………菅原文太

原 虎胤（信玄の重臣）……………六戸 錠

直江実綱（謙信の重臣）……………宇津井 健

今川義元……………中村勘九郎



- 飯富兵部 (信玄の重臣) …………… 児玉 清
- 真田幸隆 (信玄の重臣) …………… 樹爪 功
- 原 昌俊 (信玄の重臣・陣屋奉行) 小林克也
- 太原崇孚 (今川家の長老・政治顧問) 財津一郎
- 寿桂尼 (今川義元の母) …………… 岸田今日子
- 諏訪頼重 (信濃諏訪の領主・湖衣始の父) 坂東八十助
- 村上義清 (信濃葛尾城主) …………… 上條恒彦
- 倉科三郎左衛門 (甲斐の豪族・里美の祖父) 浜村 純
- 北条氏康 …………… 杉 良太郎
- 八重 (三条夫人の乳母) …………… 小川真由美
- 甘利虎泰 (武田家の重臣) …………… 本郷功次郎
- 武田晴信 (信玄の少年時代) …………… 真木蔵人
- 石和甚三郎 (信玄の近習) …………… 丹波義隆
- 塩津与兵衛 (信玄の近習) …………… 穴戸 開
- 武田太郎 (信玄の長男) …………… 中村七之助
- おらん (信虎の側室) …………… 宮崎萬純
- 彌々 (晴信の妹) …………… 山下容理枝
- たき (湖衣姫の乳母) …………… 結城美栄子
- とき …………… みずきれい
- よし …………… 大西加代子
- 浅黄 …………… 室井奈穂子
- 若狭 …………… 飯島京子
- 高遠頼継 …………… 三ツ木清隆

- 馬場信春 …………… 美木良介
- 千野南明庵 …………… 藤木 悠
- 鎌田十郎左衛門 …………… 坂部文昭
- 平五 …………… 松原一馬
- その他の人々 …………… 以上

武田氏略系  
 源義光—義明—清光—信義—信光…(十一代略)…信縄  
 (武田氏)



★ 大河ドラマ

回	題名	放送期間	作(原作)	中心人物	主な出演者
1	花の生涯	38. 4. 7 ~38.12.29	舟橋聖一	井伊直弼	尾上松緑・淡島千景・佐田啓二
2	赤穂浪士	39. 1. 5 ~39.12.27	大仏次郎	大石内蔵助	長谷川一夫・山田五十鈴・尾上梅幸
3	太閤記	40. 1. 3 ~40.12.26	吉川英治	日吉丸から 豊臣秀吉まで	緒形 拳・藤村志保・高橋幸治
4	源義経	41. 1. 2 ~41.12.25	村上元三	源義経 弁慶ほか	尾上菊之助・藤 純子・加東大介
5	三姉妹	42. 1. 1 ~42.12.24	大仏次郎	青江金五郎と 旗本の3姉妹	岡田茉莉子・山崎 努・栗原小巻
6	竜馬がゆく	43. 1. 7 ~43.12.29	司馬遼太郎	坂本龍馬	北大路欣也・浅丘ルリ子・高橋英樹
7	天と地と	44. 1. 5 ~44.12.28	海音寺潮五郎	土杉謙信	石坂幸二・中村光輝・新珠三千代
8	樅ノ木は残った	45. 1. 4 ~45.12.27	山本周五郎	原田甲斐	平幹二郎・田中絹代・吉永小百合
9	春の坂道	46. 1. 3 46.12.26	山岡荘八	柳生宗矩	中村錦之助・長門勇・小林千登勢
10	新・平家物語	47. 1. 2 47.12.24	吉川英治	平清盛ほか	仲代達矢・中村玉緒・佐久間良子
11	国盗り物語	48. 1. 7 ~48.12.30	司馬遼太郎	斎藤道三・織田信長 明智光秀	平幹二郎・池内淳子・近藤正臣
12	勝海舟	49. 1. 6 ~49.12.29	子母沢 寛	勝海舟	渡 哲也・松方弘樹・大原麗子
13	元禄太平記	50. 1. 5 ~50.12.28	南条範夫	柳沢吉保・柳沢兵庫 大石内蔵助	石坂浩二・若尾文子・江守 徹
14	風と雲と虹と	51. 1. 4 ~51.12.26	海音寺潮五郎	平将門	加藤 剛・真野響子・緒形 拳
15	花神	52. 1. 2 ~52.12.25	司馬遼太郎	大村益次郎	中村梅之助・加賀まり子・中村雅俊
16	黄金の日日	53. 1. 8 ~53.12.24	城山三郎	呂宗助左エ門	市川染五郎・栗原小巻・丹波哲郎
17	草燃える	54. 1. 7 ~54.12.23	永井路子	源 頼朝 北条政子	石坂浩二・岩下志麻・松平 健
18	獅子の時代	55. 1. 6 ~55.12.21	山田太一	平沼鉄次・おもん 菊谷嘉顕	菅原文太・大原麗子・加藤 剛
19	おんな太閤記	56. 1. 11 ~56.12.20	橋田寿賀子	ねね 豊臣秀吉	佐久間良子・西田敏行・藤周 弘
20	峠の郡像	57. 1. 10 ~57.12.19	堺屋太一	大石内蔵助	緒形 拳・多岐川裕美・松平 健
21	徳川家康	58. 1. 9 ~58.12.18	山岡荘八	徳川家康	滝田 栄・大竹しのぶ・武田鉄矢
22	山河燃ゆ	59. 1. 8 ~58.12.23	山崎豊子	天羽賢治 天羽 忠	松本幸四郎・西田敏行・島田陽子
23	春の波濤	60. 1. 6 ~60.12.15	杉本苑子	川上音次郎 貞奴	松坂慶子・中村雅俊・風間杜夫
24	いのち	61. 1. 5 ~61.12.14	橋田寿賀子	高原未希	三田佳子・役所広司・泉ピン子
25	独眼竜政宗	62. 1. 4 ~	山岡荘八	伊達政宗	渡辺 謙・北大路欣也・岩下志麻

# 会報

第一号

昭和33.6.1

兵庫県宍粟郡山崎町  
教育委員会内  
宍粟郷土研究会  
電話二三番

## 発刊の辞

会長 山崎町長 村上 彰 君

一時中断していた本会が、多くの志を同じくする人々の力強い意欲に支えられ、新しく発足することができましたことは、慶びにたえられません。

今の時代は何事によらず、新しきもののみを造らうということが流行していますが、古きを訪ねて、その文化の跡を探索し、私達の住む郷土の歴史を知ることが意義深いことと思えます。そうして、このような研究の上に立つて、新しい宇宙時代に処してゆきたいものです。

この郷土研究会が、草創の宍粟の文化性を高め、香りの高い会として進展し、町政の上に裨益すること大なることを信じますので、大方諸賢の御支援育成をお願いして発刊のあいさつといたします。

## 大きな期待を

桐山 宗吉

社団法人兵庫県観光連盟  
専務理事

人々は自分の生れたところ、住んでいるところに就いての知識に意外乏しいものです。

殊に地質や種生や鉱物や、そして史跡、民俗芸能、習俗等々、知つていてもその真の良さや価値や、死んや埋もれていた祖先の遺物などに至ると、他から指摘されてはじめて吃驚し、慌て、そして今さら成程と頷くようなことが同々あるようです。

宍粟郡は山また山の、人は随分早くから住みついていたろうが、何分にも交通不便で知られていないことが多い。立派なものが多数にあるらしいが、文化的発掘がおくれている、その真価が明らかになっていません。

私どもが「ここにこういう踊りがあったはず」と、調査に赴くと、やっとその地元の人達が「あれがその様に学的に貴重なのですか」と、驚かれるようなこともありました。

宍粟郡一円にはまだ、こうした隠れた立派なものがあると思えます。察しみます。

できれば私も皆さんと一緒に実地踏査や研究に参りたいくらいですが、宍粟郡にもその道の良き研究家が多数にいられることすし、次々とすばらしい

報告の出るのを衷心から期待しております。

それと共に、山崎町はもとより、一宮、夜賀、安宮各町、千種村の各当局と議会が、この貴重な研究に協同して、醸出の上での当然の理解を添くされることが望ましいものです。

## 會報の発刊によせて

島田 清

三月二十一日、花々しく再発足した「兵栗郷土研究会」では、続いて會報を出されることとなった。まことに順調なすべり出しである。私は、まず、何よりもこのことをおよろこびしたいと思う。

兵栗郷土研究会の會報は、これまで、昭和七年から九年までの間に七冊、同二十一年から二十三年までの間に五冊が出ている。前者は、主として安田青風先生の編輯であり、後者は、私の編輯したものであるが、どちらも、数年を経ぬうちにとまづてしまったのは、會員の数が少く、会の基礎が食しかつたためである。ところが今回は、會員の数が五百を越え、これまでに見ぬ堅固なものとなった。県下の郷土研究団体をながめてみても、これだけの會員数を誇つてゐるところは

数えるほどであり、皆さんの理解と熱意のほどが察せられる。

山崎町当局も、山崎町教育委員会においても、この事業に対してはいろいろと援助して下さるようであるし、本会創立当初からの有為會員も、引続いてお世話をしていただいている。また新しく加わられた方々も熱心に協力されて、会の土台は磐石の重みを加えた。思うことは何でも述べあい、検討しあつて、どうか、長く続くようにしてほしいと思う。

會報は、そのためのよき広場となり、発展のための大切な機関になることであろう。會員各位の自重と精進をこいねがつてこまぬい。

會報の再刊されるのを喜び、思いつくままを述べば序文とした次第である。(昭和33.4.30)

## ふるさと

岸野 市五郎

ふるさとの山に、ふるさとの川、ふるさとの風物は一木一石に至るまで、懐しいものでございます。その風物は故郷を離れて、一層懐しく、また、年をとる程に、いよいよ、なつかしさを増すものです。

人工衛星をわきも一閃着いたしました今日、この次



は、世界中のどこで何が飛び出すかと、人々の眼が斜  
等の前方ばかり見つめて、足もとを奪われ、古文化を  
たずねることを忘れ勝になつて居ります。

二の隙、去る三月に、故前野猛天氏、安井寅一氏、  
志水喜治氏、春名荒太郎氏、横井忍一氏等の方々の  
お骨折で四百名近い多数の会員を持つ、兵庫郷土研究  
会が再出発したことはスバラシイことであり、またこ  
の上もない有難いことでございます。どうか此の研究  
会が村上会長はじめ、会員各位の力で、郡民の心の灯  
火となり、エネルギーの源泉となるようにお祈りする  
次第でございます。



# 歌の風土記

入 江 静 夫

郷土の語り高い歌の数々の中に、仕事歌や、名所や  
風俗を歌った歌が又山あります。昨年大阪中央放送局  
より歌の風土記兵庫巻の巻で、アナウンサー後藤恵美  
さんや土地の方々により放送しました歌をお聞きにな  
った事と存じますが、郷土の歌は懐かしいものです。そ  
の中の二つ二つをお知らせします。

石橋き歌（山崎町葛天に伝わる土地の雰囲気のある

歌)

一、山がなれども小菰野の名所 ソリヤく

音に名高い コリヤ 紅葉梅 オモシロイ

アラナンジャイナー ヒョータンジャ エンヤエント

二、うちの裏には二又の榎 ソリヤく

榎の突ならいでもせげがなる (一に同じ)

もみすり唄 (一宮町黒原に残っているのんびりした歌)

一、挽いておくれよ一番挽きを

二、秋が来たかよ 鹿さえなくに

三、五月水ほど 恋いこがれても

四、山が高いので繁盛が見えぬ

繁盛恋しや 山にくい

亦、旧くから伝わった歌で「ちやんちやか踊り」の  
様な歌もあります。流行歌で影を無くしつつ、民謡を採  
りて見たいものです。

ちやんちやか踊の際に歌った歌

(葛天の上ノに伝わる歌)

せど川踊り

こをきり 小竹が そさををて えぎりしよ

いつもでまこぬせど川へ今夜出て来て名を流すおれをしのばば冬つばき色に出さぶと目でしのべおれをしのばば橋詰よ水はななうけまだ会えぬしらすすりのそばにねて悪いよらずとみをうめた

## 穴泉鉄について

牟野正彦

郡北の山地を歩かれたことのある方々は、谷向の各所に所謂「カナクソ」の山がうす高く集積されているのを見られること、思いますし、戦時中にも、戦後の現在でもこの「カナクソ」が鉄鉱資源に乏しい我國の製鉄原料の一部に利用するために搬出され、又搬出されつゝあるのを御承知のこと、存じます。

幕末、明岩に西洋流の製鉄法が伝えられるまでは本郡産の鉄は、他地方の鉄と共に刀剣や其他の器具類製作の原料として甚だ珍重せられ、その名も「穴泉鉄」「千種鋼」と称せられて居つたのであります。大正九年に刊行せられた「千種村誌」は神戸又新日報の掲載を引用して、皇后様の御守刀になつたのは千草鋼であつたと記して居りますが、これは千種鋼が全国的に名声を得ておつたことを示すものと言ふことが出来ると思ひます。

この本郡産の鉄についてはすでに関心をもちられた方々によつて地味ではありますが研究されております。私が知りえた範囲で申しますと「兵器史学」に小原鶴男氏が「千種鉄」の論文を発表され、「志佐液」にも同様発表あり。「東北地理」に田辺健一氏が「兵庫県穴泉郡下のタタラ鉄滓調査報告」を発表されておりますと、「近畿民俗学会」では「奥播磨民俗探訪録」に音水峽山の調査報告が掲載されております。又、神戸新聞に連載されました「祖先の足あと」の筆者である赤松啓介氏も昭和三十二年十月二十五日の記事に、千種鉄の調査は日本製鉄史のカギを握るものとして、その研究の重要性を述べて、考古学者和島誠一氏を同伴千種村を訪ねて居られます。加西郡北系町の三枝啓介氏も、播磨郷土研究誌上に「播磨刀工略史」を執筆中ですが、「穴泉の刀工及び穴泉鋼」について相当に頁数を費しておられます。尼崎工業高校の田淵保雄氏も調査に表裏されております。又、嘗つて千種村駐在巡査であつた安東某氏は千種村の山谷を巡視中に、この方面の調査にも興味を有せられ研究もかたりす、一人でいたときいて居りますが、発表されたものを拜見する機会をえないのを残念に思つておりますし、小原某氏はタタラ鉄を録音テープにとられていると聞いておりますが、波賀町野尻の稲本善正氏は鍛刀の方面から

衆鉄に関心を持つて研究をすゝめておられます。尚、近年、日本製鉄史の研究の必要性が論議され、岡山、広島、鳥取、鳥根等の中国諸地方の研究者間に「タタラ研究会」が結成されて、古代から近世に亘る総合研究が企画され、道跡の発掘調査や、文献による研究がすゝめられて、全国的な学会として発展しつゝあります。

ところが、「千種鋼」として名声をもつ本郡の製鉄事業の研究をして見ますと、残念なことに史料がすでに散逸して見るべきものが誠に少ないこととあります。村々の古老にしてみましても、実際に製鉄事業についての経験はなく、少年時代に見たおぼろげな記憶でもあれば良い方で、伝承としても食糲なものしかえられないのが現実なのであります。その上に「カナクソ」でも次々に搬出され、売却されて、漸次その数量を減じてゆく有様で、おそまき乍らでも、今直ちに資料を整理、記録してゆかなければ、将来は更に研究が困難をきわめることになるのを憂えております。会員諸氏のお手もと或いは御親戚、知己の宅には案外に眠っている史料があるかも知れないのですが、是非共郷土史研究の進展のため関心を高めて頂いて、資料の発見に御協力を賜りたいと存する次第であります。(これは単に製鉄関係のみではありませんが——)



## 殿様殿古墳調査報告

山崎高校地歴班

去る三月末に、兵庫県山崎町須賀天字梅ヶ谷、内海保雄氏所有の「殿様殿」を開墾中、古墳が発掘された。以下調査報告をする。

### 一、古墳位置及形式

願壽寺より上手の国道より北側の傾斜地を約一五〇米上った道路右手の傾斜地の開墾地であり、覆土は取除かれていた。直径一〇米前後の小円墳である。古墳時代後期のものと思われる。石室の石は比較的小さい粗雑な石が使用されている。蓋石は一個のみ、内海家の庭に運ばれている。他は明瞭でない。

### 二、伝 説

内海家の伝承では、殿様に資金したが返済出来ぬのでこの土地を代償に得たので「殿様殿」と称し、円墳の上には椀の大木が生えていた。

### 三、出 土 品

須恵器蓋付杯(六個) 外破片多数 金耳鈿(五)  
 鉄製直刀(二) 鉄製管(一) 鉄鏡(四) 蝦耳飾(一)  
 釘状鉄武器(一) 外鉄片あり、弥生式土器(出土地は古墳附近)  
 壺の底部、高杯の足部、破片其他。



# 明治十年頃の物価

栗山宗知

実栗郡山崎町須賀沢、内海保夫氏宅で古墳を拜見の時、酒類の値段表を発見し、その上下の激しいのに驚くと共に、現在との向きの多い事を面白く思つて、左に当時の重むものについて記してみた。酒は、新酒、古酒、並酒、上酒と分れて、それぞれ一、二銭の向きがあるが、一月に安くて、十一月頃に二、三銭の値上りがある。 (単位は一升で、金額は銭)

	(明治十年)	(全十一年)	(全十三年)
酒	新七— 古一〇銭	九— 一〇銭	一— 一五銭
焼酎	一六	一八	二二
みり	二〇	二二	二六
す	六	七	七
米	四	四	六、二
麦	三	三	六、二
割木(一駄)	二五	二五	二五
人夫(一人役)	六	六	六
雇用人(一ヶ年)	七円	七円	七円

# 郷土史料解説 (一)

安井俊二

実栗郡誌 未刊本である。僅かに写本で伝つてい  
る。徳久屋本、門前屋本、妹尾本、栗山本などがある。  
原本は不明で、序文のついている徳久屋本がやや原本  
に近いと思われる。二百五十年前の宝永五年に山崎町  
山田町片岡醇庵(米屋五郎大夫)が書いた本で、内容  
は、郡境、郷・城・市・山川・宮社・土産・地勝、風  
俗、人物、寺院と項目を立てて郡内各地の貴重な記事  
が多い。醇庵は相当な学者であり、当時としてはあら  
ゆる史料と实地踏査をして書いている。ただ「播磨風  
土記」は、後年発見されたので、その資料として取り  
入れられていないのが残念である。同人は別に「実栗  
郡守令交代記」(別に解説するが)を元禄十二年に著  
わしている。この本の復刊を痛切に感じて、近日播磨  
史談会と本会共同で刊行準備中であるので、皆様に読  
んで頂く日も近いと思う。



# 伊和神社

安井義郎



伊和神社は、大己貴神を主神とし、少彦名神、下照姫命を配祀とする。大神の名前は別に大日持御魂神とも申し、産業を勧め、医業の法を定め、岩窟の術を教えるなどして、社会の人達の幸福と安泰を図り給うた。それら大神の伝説は、播磨一円にわたつたとどめられている。

神社の創祀については大神が各地御巡歴の最後に、伊和里（現在当社のある地方）に帰り来られ、我が事は終つた、「おわ」と仰せられて神鎮りましたとつたえており、即ち大神終焉の地で国人はその御恩徳を慕つてこゝに社殿を営んで奉斎したのが創祀であります。神社の社殿は多く南面又は東面しているのが普通ですが、当社は鶴石のいわれもあるが、故郷出雲をお慕いになつてか、北西の方を向いており、めずらしい姿だとされています。

爾来、時代の交遷は、社運の上にも盛衰の迹をとどめたが、現今なお播磨の国の一の宮と仰がれ、一回鎮守の第一の宮と尊ばれているのである。

### 前野猛夫氏

兵庫県山崎町、明治三十五年生、四月十日突如永眠されました。本会の前会長、元山崎町長で本会再発足に特に尽力下さった方。謹んで哀悼申します。

## 會報

三月二十一日山崎中央公民館で、本会再発足の第一回総会開催。会員六十余名出席、横井怒一氏司会。前野猛夫氏議長となり、前野氏の挨拶、安井寅一氏の郷土会の沿革についての話の後、会則承認、役員選任を終り、会後、島田清氏「兵庫県古文化財と史蹟」の演題による有益な講演があり、四時二十分閉会。

同日午後七時半、蒔屋旅館において、島田清氏を囲んで座談会を開催、地方俳人、句碑などについて座談出席者約二十名であった。

安志古文化財見学。五月十一日午前十時安志教蓮寺に集合、下村慶之助案内にて

- 閉善寺 水庵の扁額、達磨木像、経筒等
- 今念寺 弘安三年二月銘の五重石塔
- 加茂神社 境内巨木と昔の広庭
- 光久寺 国宝不動明王像など
- 法性寺 最勝院殿蓮法華經、各大名の和歌短冊軸

を観賞し、法性寺境内の温泉場に休憩。参加者十名、天候にあまり恵まれず遺憾であった。

# 兵栗郷土研究会々則

第一条 本会は兵栗郷土研究会と称する。

第二条 本会の事務所を兵庫県兵栗郡山崎町に置く

第三条 本会は文化財の保存、維持及び調査研究をな  
し、地方文化の振興をはかるを以つて目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達せんがため、左の事業  
を行う

- 一、 随時例会を向き会員の調査研究を発表する
- 二、 会報及び機関紙を発行、又は古文書等の復刊

三、 斯道の權威者を招き、講演会、講座を開催

四、 史蹟又は古文化財の实地調査、見学

五、 其他必要と認める事項

第五条 本会の趣旨に賛成するものを会員とする

第六条 本会に会長一名、副会長二名、幹事及び会計  
若干名を置く

必要があるときは顧問、名誉会長、名誉会員  
を置くことができる

第七条 会長は会務を總理し、副会長は会長を補佐し  
幹事は会務を執行する

第八条 役員は任期は二ヶ年とし、総会に於て会員中

より互送する

但し会計は幹事会において推挙する

第九条 本会の總會は、毎年十月開催し、必要あると  
きは随時開催する

第十条 会員は、毎年金壹百円也を会費として賦出す  
るものとする

## 役員名簿

会長	村上 彰治
副会長	岸野市五郎
幹事	安井 寅一
	志水 喜次
	和田 秀夫
	横井 怒一
	三木金之助
	春名荒太郎
	入江 静夫
	福井 説次
	宇野 正瑛
	福井 政男
	栗山 宗知
	下村慶之助
	田内松右エ門
	庄 和夫
	平形 謙岩
	横井 怒一
	島田 清
顧問	向計

### 原稿募集



会報第二号は八月に発行の予定ですから、七月末日までに多数の御出稿をお願いいたします。誌面は僅かですので、四五百字までのものを歓迎。やがて会誌発行のときは、長文の研究発表をして頂く予定です。(編輯者 入江、和田、宇野、安井)

# 會員名簿

谷川 道一	前野 四郎	荒木 専治	原 軍治	北川 文三	三木 辰由	(中慶次)	吉本 隆
松岡フサ子	山下 駿岩	榎田敏太郎	杉山 義昭	梅田美津子	(今宿)	伊藤 繁治	戸田 吾市
島本つや子	豊住 昇岩	三浦 薫治	妹尾 正三	北川 文三	(今宿)	域内 健一	吉田 一二
原 しげ	背柳 又岩	村上 彰治	(北真町)	(旭町)	北 弥太郎	永峰平一郎	横井 恕一
(元山崎)	志水 富岩	橋本金三郎	和 秀雄	立柳甚太郎	井上ますみ	橋本 三郎	小川 真一
松本 敬二	高野 安岩	藤村 志	原田 弥三	大上仁一郎	川端 政市	杉本 伊三	西川 真一
長田 繁	伊藤 保次	志水 確二	村上直次郎	(鴻ノ町)	杉元 清美	大前 弘志	上田 邦太郎
壺坂 壽	塚田 工	(山田町)	山田 稔彦	茶 耕二	水門 節岩	尾島 一	北川 知恵子
前野 好郎	清水 直岩	長尾 直一	原田 公助	岡田 二郎	入江 静夫	福井 詠岩	小田 静
前野 佐吉	志水 徳二	高野 圭介	下村 憲一	高野 保雄	(大次町)	福井 詠岩	中島 一之助
山中 次郎	志水 博行	猪尾 陸雄	本条 猛二	大坪 岩吉	池田 大興	福井 寛一	菅江 董
存藤 志次	(本町)	尾上 和作	友沢 侯祐	(富士野町)	横岩 薫	福井 精一	清水 登岩
前野 三郎	山子 繁太郎	志水 宏太郎	武藤 林之助	村上 寅一	(上寺)	高井 国男	岸根 勇一
前野 猛夫	鶴野 正岩	横田 一夫	(福原町)	志水 祐介	小倉 繁則	吉田 安岩	(本鹿次)
(西新町)	猪尾 金治	北川 賀寿雄	三木 啓司	赤松 円珠	(左能)	岸根 金吉	岸本 六郎
安井 克典	松本 富次	松本 修三	志水 重隆	古塞 八郎	山根善次郎	安原 郁	田路 義一
支 沃	塚田 栄一	塚本 重隆	古塞 八郎	神山万兵卫	岸根 隆雄	東 幸岩	
庄 二	志水 康岩	志水 祐介	赤松 円珠	小倉 繁則	高井 国男	岸根 勇一	
中 村	久保 直市	池田 大興	福井 寛一	福井 精一	福井 寛一	菅江 董	
徳 郎	山根善次郎	福井 詠岩	福井 精一	福井 精一	福井 精一	清水 登岩	
	南光 隆雄	福井 詠岩	福井 精一	福井 精一	福井 精一	清水 登岩	
	岸根 金吉	福井 詠岩	福井 精一	福井 精一	福井 精一	清水 登岩	
	岸本 六郎	福井 詠岩	福井 精一	福井 精一	福井 精一	清水 登岩	

安井 淳三	桑田 茂	志水 烈	(門前)	志水 武雄	長田 久也	矢野貞之助	尾崎 茂樹
加納 広一	山根 省吾	春名荒太郎	根岸 元彦	藤本 嘉男	片山 英之	早川 宏司	青山 実
淡井のり子	八田 幸夫	菅原 征夫	安井 良一	伊野 利天	可藤市郎平	片山 元岩	平山 順岩
(西康次)	池田 熟	宗接良之助	安井 俊二	内海太一郎	藤井 慧兼	(菅野)	大谷作次郎
大井万兵工	谷口 二郎	滋井 至孝	福山 清一	(戸原)	藤井 政岩	長田 重男	(千種)
菅谷 正三	菅谷 正三	小林 登	福安 敬岩	金山 徳身	長井 政岩	長田 重男	(千種)
竹家 善二	小西 善一	小林 善一	高田 彰秋	宮本 英一	横野 一夫	長田大三郎	住江宗三郎
田中 稔	城内宇三郎	上西 久	中村 直美	宮本 英一	猪尾 健一	志水 孝二	井上卯三郎
岸野市五郎	田路 強	中西 善吉	中村 直美	井口 雅雄	下村 光岩	福井 政男	
三木金之助	山下 要一	丸山 誠二	(如生)	志水 善好	栗山 行雄	藤田 都岩	(波賀)
名賀 市郎	世木 新	八木 政夫	大西 信次	(安富)	栗山 宗知	尾鼻 正一	田中 秀雄
藤村 洪	鎌田まつ丞	山本 充	中村 園吉	中村 潔	山下 宇市	伊塚 義雄	田中 堅一
三里守太郎	高島 登	熱田 久雄	(城下)	松下 政岩	岩原菊次郎	西沢 謙道	田住 竜
岡本 義則	坂本 初岩	日下 修一	西川 八郎	下村 政岩	井上 盛夫	後藤光太郎	久宗作太郎
鈴木 秀吉	藤田 克己	森谷 吾一	西川 幸一郎	下村 慶之助	(神野)	中藤 春岩	
高井 新	平田寛之助	金尾 幸夫	西川 幸一郎	下村 慶之助	(土万)	浅田 幸岩	(一宮)
鈴木 利夫	三木 昌	春名 道弘	森下 琢郎	吉田 元	平野 鶴岩		山本 元
横尾 文彦	神戸 慶岩	畑中 政雄	片山 猛	松下 政市	庄 和夫		上田 光夫
鎌田真一郎	新野 繁次	藤岡 松子	牧野 洋子	原田 浅岩	大路 修一		前田 達
石沢たかの	中川 豊	島永 新一	山下 清市	野中 竜二	(葛天)		赤松 繁一
池垣 福男	春名 清	小倉 孝義	中川 透	野中 竜二	大野 修一		田内猪之助
長谷川友一	志谷 せい	中原 照男	竹添 勉	理部 恵病	平田 輝太郎		田内松石工門
西村 英男	番尾 善彦	菅原 安吉	名賀 勝三	(河原)	有元 勉		久保田悦岩
							田路 武
							福田 耕一



伊藤 善照	森林 静雄	衣笠とし子
(山崎高等学校)	藤原 義宣	宇野 登教
山口 定	上林 甚大	
竹田 享	牲川 勇	工藤 栄若
下村 三郎	尾田 俊児	福井 一郎
南部 悦吉	神名 章夫	立石田鶴鶴
福井 政雄	梅林 一知	福岡キミ子
藤田 親章	田住 剛	茂田 信子
高尾 孝	大西 耕雲	阪本 和夫
安黒 義男	上野 正典	大上 善示
小島 薫	下多 謙吉	垣口ちる子
山口 猛雄	(山崎小学校)	前田千津子
大岩 節治	谷村恵智子	
宇野 正英	平形 謙治	神名 彰子
福井 栄子	千崎しずる	西島 薫子
(山崎中学校)	山本 隆一	大坪 隆昭
木村 逸雄	進藤 正春	田中 正一
尾崎 正一	黒田 吾一	(神戸市)
栗山 巽	大谷 善広	杉本 広一
井口 均	田路ちよ子	
福井 良彦	大谷喜代子	
久宗 丑雄	太田 紀子	
	前野 賢治	

# 春季見学会案内

— 播磨路の史蹟と古美術めぐり —

△日 時 六月八日(日)午前七時神姫バス集合  
 △会 費 金三百円 申込と同時に払込のこと  
 △昼食持参のこと、会員外の方も御参加下さい  
 △申込×切 六月五日までに  
 本会又は福井怒一、志水富次、和田秀男、  
 福井記次宛

△斯界の権成者島田清先生、同行説明して頂きます

巡回予定地

1. 姫路市御国野村国分寺  
塔趾、山の腰古墳、壇上山古墳等
2. 加古川市加古川町北在家  
鶴林寺本堂、太子堂、絵画仏像等
3. 尾上神社 釣鐘等
4. 神戸市垂水区伊川谷町  
太山寺本堂、その他重要文化財多数

◎六月七日午後七時半から(山田町公民館で)「播磨路の史蹟と古美術」の講演会を開催しますから、多数御出席して下さい。

33年分会費未納の方は会計係又は最寄役員の許迄、金100円もお届け下さい。



# 記念講演会のご案内

神戸新聞社  
兵庫県学校厚生会

左記により記念講演会を開催いたします。杜山悠先生は神戸市在住の

歴史作家でNHK「兵庫史を歩く」、兵庫県学校厚生会研修旅行の講師等もされており、多くの著書も出されております。「旅心」「史譚」「有馬温泉」「新室津紀行」「北条鉄道」「竹内街道」「丹後の神々と古代伝承」「楠木正成」等の書物が町内の書店にありますのでお知らせいたします。

## 記

- 一、日時 六月二十三日(木)午後一時三十分
- 一、会場 山崎文化会館
- 一、講師 杜山 悠先生
- 一、演題 「武田信玄と戦国時代の人々」
- 一、聴講料 無料
- 一、主催 山崎町文化連盟  
山崎郷土研究会  
山崎町教育委員会  
山崎文化会館
- 後援 新潮会  
昭和会  
NHK姫路放送局

## 講師紹介

雑誌・新聞等の仕事から作家となる。第四十五回直木賞候補作「お陣屋のある村」、同四十六回「粟井宿の人足」、同四十七回「無頼の系図」講談クラブ賞「ギスカン」近作に「日本三民伝」の一つ「蟬丸の歌」(創作ノートの)。 「旅心」(旅と歴史と独り酒) 「史譚」。日本の街道シリーズとしては「木曾路さすらい」「山陰道史譚」「国東の道」「山陽道史譚」「飛騨の道」があり、著書約六十冊。

- 日本文芸家協会会員。
- 日本ペンクラブ会員。
- 日本風土紀の会主宰。
- NHK神戸放送局「兵庫史を歩く」講師NHK文化センター講師。
- 大阪・神戸読売文化センター講師。
- 神戸市在住。

表装全般

…古いものを大切に…

表具師 **松本永春堂**

山崎町鹿沢本通り  
TEL. 62-0122

## 事務局だより

- 一、春の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申込み下さい。
- 二、六月二十三日（木）記念講演会が開催されます。会員のお方は全員ご聴講下さいますようお願い申し上げます。蔵書の貸出しについて掲載しております。どなたでもお気軽にご利用下さい。

（山崎郷土研究会事務局）

山崎町

安井清介宅